

『魁本対相四言雑字』について

鈴木久男

まえがき

現存するもので、世界一古い中国の算盤図は<魁本対相四言雑字>(1371年)である。

この本が発見され、研究されるようになった経過を振り返ってみるとつぎの如くである。

(1) 王庭顕：『珠算学』1962年 台湾 中華書局刊。

コロンビア大学蔵『新編対相四言』1436年の中に算盤図のあることを発見。

台湾『中央日報』1965年4月30日にも発表。

(2) 戸谷清一：『数学史研究』3巻2号、1965年7～9月に、「そろばんの図が画かれている最も古い文献<対相四言>について」を発表。

『日本珠算史』1967年にも紹介。

(3) 下平和夫：『魁本対相四言雑字』1920年 米山堂複刻本を発見。鈴木久男へ連絡。

(4) 鈴木久男：『日本珠算』196号 1970年6月に「新しく発見された最古の算盤図」を発表。

(5) 戸谷清一：『珠算春秋』47号 1979年5月に「対相四言について」

そろばん図の最古資料」を發表。華印椿，余介石氏らに依頼した調査資料も報告。

- (6) (5)は徐振華女史によって中国訳され『山西珠算』9. 1980. 8. 5 に發表された。「関于对相四首」——算盤図的最古資料(摘録)

その後の研究経過

- (1) 戸谷清一は，辻善之助：『日本文化史』1953年に，『空華日工集』応安三年九月二十二日の条に，“唐人刮字工陳孟才，陳伯寿二人来，福州南台橋人也”とあることを知り，鈴木に報告。
- (2) 鈴木は，小林善八著，弥吉光長解説『日本出版文化史』1938年初印，1978年複刻。木宮泰彦著『日本古印刷文化史』1932年初版，1965年再版 富山房。川瀬一馬著『五山版の研究』上巻1970年などの資料を調査し，戸谷にも報告した。

空華日工集について

義堂周信(僧 周信)1326年～89年の著で，空華日用工夫略集，空華日工集，空華和尚日工略集，空華老師日用工夫略集とも呼ばれる。

絶海とともに五山文学者の双壁で，南禅寺の寺主，土佐長岡の生れ，十四歳のとき比叡山に登り天台の教義特に台密を修め，内外百家の書を学んだ。十七歳のとき夢窓国師について禅を修め，夢窓の寂後，建仁寺の竜山に学び，のち鎌倉に赴いて円覚寺に住し，管領上杉基氏が報恩寺を創建するや招かれてその開山になった。至徳三年(1386)建仁寺より南禅寺に移る。元中六年歿。年64。

空華日工集の応安三年九月二十二日(1370年)の条に、つぎの一文がある。

唐人刮字工陳孟千
陳伯寿二人來、福
州南台橋人也、
丁未年七月到岸、
大元失國、今皇帝
改國為大明、孟千
有詩、起句云吟毛
玉兔月中毛

とある。丁未年、1367年に日本へ着いたことがこれで知れる。

また当時開板が容易でなかったことを、永徳二年(1382)の条で、

元享釈書乃日本
高僧伝也云云。
開板之費賜江州
其田地今年開板
已成、其板亦燃
可惜也、蓋為再
刊之張本、故特
及之君領之。

と記している。元享釈書一部開板のために、江州の田地が充てられたというの¹⁾である。

陳伯寿ら雕工について

魁本対相四言雑字には、標題のつぎに、

洪武辛亥孟秋吉日金

陵王氏勤有書堂新刊

と二行が記されており、その一丁、三丁、六丁、七丁および八丁の五箇所の表、右側の欄外に「伯寿」の二字が刻まれている。伯寿は空華日工集に記されている陳伯寿である。

欄外に名を彫ったのは、宋代に、大部な丁数の書物を、複数の刻工が分担し

た場合に、賃銀を要求するための証として附加したものであろうという。²⁾

当時わが国にいた中国の雕工は、三十余人の多数であったらしい。彼らは概ね福州辺から渡来したらしく、彼らが相次いで来朝し、京畿地方に在って、盛んにわが開版事業に尽したのは、応安を中心とする(1370年ごろ)二三十年間で、当時春屋妙葩が、天竜寺の雲居菴、金剛院などで刊行したものや、臨川寺版をはじめ五山の寺寺で開版された幾多の典籍は、概ね彼らの手に成ったものではあるまいか。³⁾

陳伯寿らが来朝したであろうことはつぎの資料によっても確かめられる。

(中原)師守記がこれで、貞治六年七月二十一日(1367年)の条に、⁴⁾

今日唐人八人付嵯峨、
是為薩去年渡唐渡日
本唐人也。影木開之輩
也、為其渡之云云、僧
以下同道騎馬廿騎計有
之、八人之外僧云云。

とある。

彼らは、禅院から依頼せられ、注文された雕版の仕事の暇を見て、自づから財を投じて開板を行っており、魁本対相四言雑字などを印行した。独力で刻苦雕刊したものもある。

李善注 文選の刊記に、

自辛亥四月起刀乃至今苦難始成矣。(1371年)

とあり、伝法正宗記には、

憑自己財物置板流行。

とあり、唐柳先生文集には、

幾年勞鹿至今喜成矣。

と云っていることからその労苦を想像できよう。⁶⁾

なぜ中国の彫工を招いたかという疑問について小林は、⁷⁾

“室町時代に於ては、書籍開板には未だ困難が多かった。国内に良工が乏しく、その為に……”と述べ、さらにその時代背景として、

“足利氏代々の将軍は、北条氏の後を承けて禅宗に帰依したので、鎌倉の禅宗は移って京都五山の禅林が栄えた。京都の五山とは南禅寺を上位として、天竜寺、相国寺、建仁寺、東福寺等である。……京都五山は、いづれも数多学僧を集め、彼らの中には、当時元が滅亡して新に興った明朝の文化を探るため渡航する者もあったが、足利三代の義満が明朝との外交関係を開いてからいよいよこの風潮が盛んになった。”と述べている。

木宮は、⁸⁾

“当時開板事業が頗る困難であったに拘らず、京都・鎌倉の五山を始め各地の禅院に於て、幾多の典籍が相次いで開版せられたのは、禅宗が公武の厚き帰依を得て、比較的財政の豊かであったことは勿論であるが、また一面元の優秀なる彫工が相次いでわが国に渡来し、わが開版事業に尽したことも与って力があった。”

と述べている。川瀬は、⁹⁾

“彼らの来朝は当方から招いたというよりは、大陸の政権の交替や戦乱の状態などから、わが国へ難を避けてその技術をもたらしたものと考えられよう。”としている。

いづれにせよ、彼ら彫工たちの努力によって、宗鏡録百卷二十五冊をはじめとする五山版と呼ばれた漢籍、語録が開版されたのであった。

尅本対相四言雑字について

この本は洪武四年（辛亥1371）に刊行された新刊本を、後続の中国の彫工

が持ってきたので、陳伯寿が自費で覆刻したものである。従って、覆刻本の日本に於ける開板は1371年以後ということになる。

唯一の伝本は、もと松迺舎文庫に蔵されていたが、1923年9月1日の関東地方の大震災で滅失した。それより先1920年7月に芥川¹⁰⁾が覆刻(300部)したからその面影を偲ぶことができるのである。

天雲雷雨日月斗星からはじまって八丁表半分まで一字一絵、それ以後は剃刀からはじまる二字一絵で終りまで続く全巻十丁の絵入刊本である。77句308語文字の横に絵があるから、“文字と言葉とを竜蒙に教授するための初等国語教科書ともいべきものである。恐らく来朝の刻工らは、これで発音の基本を教えたものと思われる。”と川瀬は述べている。¹¹⁾

気になるのは稀書複製会の解説である。

松迺舎文庫本について三説を掲げている。

- a 当時(南朝時代)のものとしては紙質がやや新しいようで、明暦ごろ(1655年ごろ)の紙質ではないか。
- b 紙質に重きを置けば明暦ごろ再び覆刻したのではないか。
- c 陳伯寿の刻板が残っていたのを再摺した(明暦ごろ)のではないか。

としている。

それはさておき、原本には、表紙の右方下端に、少府図書(姫路藩侯 酒井氏)の朱印の貼附小箋。初めの頁に、菖葭堂蔵書印、¹²⁾浅草文庫の朱印、菅氏文庫の黒印が、最終頁には、菅氏文庫、昌平阪学問所の黒印と瀬芳閣(浅野梅堂)の朱印があり、欄外下方には文化甲子(1804)の四字が朱で印記されていたという。これは昌平齋で教鞭を執った(天明8年~20年)柴野栗山(文化四年歿)が検証したものである。と述べている。

この柴野栗山は手書による対相四言と題する十一丁の書を 梅花書屋から文化四年(1807)、歿後刊行している。が、ここには算盤や算子はない。

さらに、文政四年(1821)にも類本があり、「新刊四言対相」の標題があり、つぎの行に

虎林、胡氏文会堂校正、書坊徐竜峰梓行と二行に記した本文十丁のもので、八丁の表の後半からは上下段とも三言を以て一段としているという、巻末に跋文一葉があり、

文政辛巳春十童 谷文二識¹³⁾
とあるという。未見であるが記録しておく。

なお、松迺文庫本の題箋は「対相四言雑字」最終頁は「魁本対相四言終」となっている。

士農工商の順に記されているのも当時としては注目すべきことではあるまいか。

中国側の資料について

王庭頭氏が、1941年コロンビア大学図書館で入手した「新編対相四言」を発見されたのち、氏の「珠算学」(1962年)で述べたことは、

宋時代の楊輝はそろばんを知らなかった。

元時代の陶宗儀は算盤珠の記述をしている。

新編対相四言は1436年の刊行である。

この書には9桁の算盤図と算子(算籌)の絵図がある。

というものであった。

戸谷は葉茂盛氏を通じて王庭頭からコピーを入手した。そのとき、王は北京図書館にも明初刊本一冊のあることを告げた。彼は、北平図書館“善本書目”四巻の第三巻47頁の2、子部 類書類に、

“新編対相四言一卷”明初刻本。

とあるのを民国23年(1934)に見た、ただし現存するかどうかは知らない。

ということであった。

王氏の研究も詳しく述べられていたが、今は之を省いておく。

戸谷は、北京図書館にこの本があるか否かの調査を余介石氏に依頼した。余教授は華印椿氏にも連絡し、華氏もまた知人に上海・南京・北京にあるかどうかを調査したのであった。

余教授は明刊(刊年不明)の35cm×22cm、全八頁、毎面五行、毎行八格、九桁の算盤のある「新編対相四言」を発見され華氏を通じてその写図を戸谷に送ってきた。(民間の個人所有物)

その後の研究で、華印椿氏から依頼された張志公先生は、「伝統語文教育初探」に、

四言雑字 李元昊訳 宋史夏国傳 P. 160

四言雑字 清屯溪開益堂刊 //

魁本四言対相 清坊刻本 P. 161 とか、

三四言雑字 北京学古堂書目 P. 161

五七言雑字 //

などを記している。

当時このような種類のもものが多く刊本になったのであろう。

あとがき

上述したとおりの経過で、魁本対相四言雑字が中国だけでなく、日本でも刊本となった事情が明らかとなったし、陳伯寿らの業績も知れたのである。私は戸谷先生から知らされた「空華日工集」の一文で、以上のことを調べ得たのである。

すべて、研究は積み重ねによって完成されて行くという実証を訴えたいためにこの一文を草したものである。

それにしても、中巖円月和尚(1300～1375)に「東海一編集」があり、
その中に九九の詩があった。元にも渡っており(1324)、卷之五

自曆譜には、

日無光。而色赤似血。	日。平貞時薨。其朝	茲寺。冬十月二十六	学九章算法。秋帰大	尚。読孝経論語。且	春在池房。就道惠和
------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------

応長元年辛亥
(一三三一年)

なる一文がある。僧にして中国の「九章算術」を学んだのである。

和尚が算木を学んだことは確実であるが、算盤は当時あったのかどうか。

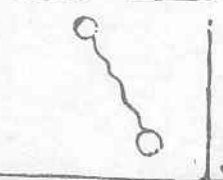
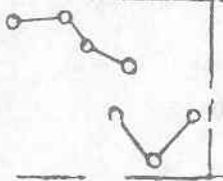
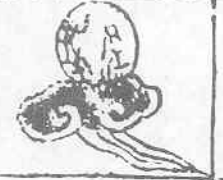
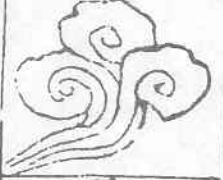
さらに、京都五山のひとつである東福寺は応仁の乱(1468)のときにも焼
けなかったお寺である。ここの了菴桂悟(1425～1514)は85歳のとき遣明
正使として渡航している。万治元年(1658)久田玄哲が「算学啓蒙」を覆刻し
ているが、「数学紀聞」によると、彼はこの書を、この寺で発見したという。

想像を逞しくすると、いろいろのことが考えられるのであるが、一応ここで筆
をおく。

- 注(1) 小林善八：日本出版文化史 P. 130
- (2) 川瀬一馬：五山版の研究 P. 144
- (3) 木宮泰彦：日本古印刷文化史 P. 268
- (4) 川瀬一馬：五山版の研究 P. 142
- (5) 同 同 P. 143
- (6) 木宮泰彦：上掲書 P. 266
- (7) 小林善八：日本出版文化史 P. 119 - 130
- (8) 木宮泰彦：上掲書 P. 258
- (9) 川瀬一馬：上掲書 P. 142
- 00 安田文庫のこと。
- (11) 川瀬一馬：上掲書 P. 216
- (12) 木村蒹葭堂のこと。江戸中期の大阪の富商。
- (13) 稀書複製会(編集兼発行者 山田清作)による。

魁本對相四言雜字

天雲雷雨
日月斗星



洪武辛亥孟秋吉日金
陵王氏勤有書堂新刊

伯壽

	衣 護		芒 鞋
	撒		蘆 簞
	脚 綳		簞 筒
	護 膝		果 香
	三 穿		手 帕
	袋 綳		綳 袋
	牙 刷		編 條
	骰 子		抱 腹



關於「魁本對相四言雜字」

序 言

林五桂翻譯

現存世界最古之中國算盤圖，却在「魁本對相四言雜字」（1371年）發現，被研究的經過，如下：

(1)王庭顯：「珠算學」1962年 台灣 中華書局刊。

發現哥倫比亞大學藏「新編對相四言」1436年，有算盤圖。

也在 台灣「中央日報」1965年4月30日 發表。

(2)戶谷清一：「數學史研究」3卷2號，1965年7～9月 發表一篇「關於畫有算盤圖最古的文獻「對相四言」」，並在「日本珠算史」1967年介紹。

(3)下平和夫：發現米山堂複刻本「魁本對相四言雜字」1920年，並向鈴木久男報告。

(4)鈴木久男：「日本珠算」196號，1970年6月發表「新發現的世界最古算盤圖」。

(5)戶谷清一：「珠算春秋」47號，1979年5月發表「關於對相四言——最古的算盤圖資料」，同時委託華印椿、余介石調查的資料也一併列出。

(6) (5)由徐振華漢譯，刊於「山西珠算」9，1980年8月5日「關於對相四言」——算盤圖的最古資料（摘錄）

之後的研究經過

(1)戶谷清一，在遷善之助：「日本文化史」1953年，「空華日工集」應安三年九月二十二日一項裡發現：“唐人刮字工陳孟才，陳伯壽二人來，福州南台橋人也”，並向鈴木久男報告。

(2)鈴木久男，調查下列三書的資料，並且也向戶谷清一報告。

小林善八著、彈吉光長解說「日本出版文化史」1938年初印，1978年復刻。

木宮泰彥著「日本古 印刷文化史」1932年初版，1965年再版 富山房。

川瀨一馬著「五山版之研究」上卷 1970年。

關於空華日工集

是義堂周信（僧 周信）1326～89年所著，別稱空華日用工夫略集、空華日工集、

空華和尚日工略集、空華老師日用工夫略集。

他與絕海併列為五山文學雙傑，是南禪寺主，生於土佐長岡，十四歲遁入比叡山，潛修天台（尤其是台密）教義，研讀國內外百家諸書，十七歲就夢窓國師修禪，於夢窓圓寂後，求教建仁寺龍山，後移住鎌倉圓覺寺，適逢地方官上杉基創建報恩寺竣工，遂被延聘為開山祖師，至德三（1386）年，自建仁寺遷南禪寺，元中六年圓寂，享年64。

在空華日工集之應安三年九月二十二日（1370）一段，有下文：

唐人刮字工陳孟千
陳伯壽二人來、福
州南台橋人也、
丁未年七月到岸、
大元失國、今皇帝
改國為大明、孟千
有詩、起句云吟毛
玉兔月中毛

據此可知，是丁未年（1367），渡航至日本的。

又於永德二（1382）年一段，記述當時出版費浩大，為出版元享釋書，甚至變賣江州地產（註1）。

元享釋書乃日本
高僧傳也云云。
開板之費賜江州
其田地今年開板
已成、其板亦燼
可惜也、蓋為再
刊之張本、故特
及之君領之。

關於雕刻工陳伯壽等人

在魁本對相四言雜字之標題後，接着印有

洪武辛亥孟秋吉日金

陵王氏勤有書堂新刊

二行，並在第一、三、六、七、八摺正面右側欄外，附刻「伯壽」二字，伯壽即空華日工集所指陳伯壽其人。

宋朝時，如遇大部書，摺數多，便由幾個刻工分擔工作；可能是謀求分配工資有所

依據，乃附刻各該工人名字於欄外（註二）。

當時住日本的中國雕刻工，似有三十餘人，他們大都相繼來自福州一帶，而在京畿地方戮力從事出版，時為應安年代（1370）前後二三十年間，當時的春屋妙葩，假天龍寺雲居庵、金剛院所印行的以及臨川寺版或五大寺所出版之許多典籍，似多出自他們之手（註三）。

自下列（中原）師守記、貞治六年七月二十一日（1367）年一段，可確知陳伯壽等人來日本（註四）

今日唐人八人付嵯峨、
是為薩去年渡唐渡日
本唐人也。影木開之輩
也、為其渡之云云、僧
以下同道騎馬廿騎計有
之、八人之外僧云云。

他們除受禪院委託、訂貨而從事製版之餘，也自投資金出版，如魁本對相四言雜字等書就是。也有個人獨力辛勤刻版印行的。

李善注文選的發刊辭中有句：
自辛亥四月起刀乃至今苦難始成矣。（1371）年

傳法正宗記有句：

憑自己財物置板流行。

唐柳先生文集有句：
幾年勞鹿（碌）至今喜成矣。

可以想像他們的勞苦情形（註六）。

招聘中國雕刻工的理由，小林善八（註七）說是：“室町時代，出版書籍還有許多困難，日本國內又缺乏好工人”，對該時代背景，又說“繼北條氏之後，足利氏歷代將軍都歸依禪宗，故原鎌倉禪宗的隆盛，遂改由京都五大寺禪林所取代。京都五大寺是以南禪寺為首，包括天龍寺、相國寺、建仁寺及東福寺。他們各擁許多博學僧侶，有些僧侶因當時元朝已亡，想一窺新興明朝文化而赴中國了。之後更由於三代將軍足利義滿，與明朝建立外交關係，而益加助長這種風尚”。

木宮泰彥（註八）說：

“當時的出版事業雖然有很多困難，但是京都及鎌倉的五大寺及各地禪院，相繼能出版許多典籍，固然是由於：禪宗因統治者的誠篤歸依獲得較為豐富的財力支援，另一方面是由於：元朝優秀雕刻工，相繼渡航前來日本，投效出版事業奏了功”。

川瀨一馬（註九）則認為：

“他們的渡航來日，與其說是由於日本所聘，無寧說是由於大陸政權更替或者是爲了躲避戰亂而避於日本，因而提供了他們的技術”。

總之，由於這些雕刻工的辛勤努力，終能將宗鏡錄百卷二十五冊爲首的，所謂五山版漢籍、語錄付梓發行。

關於魁本對相四言雜字

這本書是陳伯壽自後續來日的中國雕刻工所帶洪武四（辛亥 1371）年新版本，加以自費複刻的。由此可知，這部書的複刻本在日本出書，是 1371 年以後的事。

留傳後世的唯一原本，是收藏於松廼舍文庫，可惜也在 1923 年 9 月 1 日關東大震災時損失。不過前此三年，即 1920 年 7 月，米山堂曾予複刻刊印三百部，所以還可窺其端倪。

此書自天雲雷雨日月星斗起，至八丁表半分止，一個字一幅畫；之後自剃刀起二個字一幅，是全書十摺、全部有畫的書。亦即書中 77 句 308 口語文字，均附有畫，所以川瀨一馬（註十一）說它“是一本供作啓蒙教育文字語言用的初級國語科書。那些渡航來日的雕刻工，大概是利用此書來教授日語基本發音”。

令人在意的是稀書複製會對松廼舍文庫書的三論點。

(a) 若說是當時（南朝時代）的書，其紙質却顯得稍新，似是明朝年間（1655 年左右）的紙。

(b) 着重紙質判斷，似是明朝年間所複刻者。

(c) 利用所留存陳伯壽版板，於明朝年間再印的。

反正，原書封面右下端貼有小附箋，蓋着「少府圖書」朱印（少府指姬路藩侯酒井氏）。原書首頁也蓋有「兼葭堂藏書印」（註十二）（朱印），「淺草文庫」（朱印），「菅氏文庫」（黑印）。原書末頁蓋着「菅氏文庫」、「昌平阪學問所」（黑印），「瀨芳閣」（淺野梅堂、朱印）。欄外下方則蓋着「文化甲子」（1804）四字（朱印）。並且說這是在昌平黌授課的（天明 8～20 年）柴野栗山（文化四年歿）查證過的。

這些柴野栗山所手寫、書名對相四言的十一摺書，於其歿後由梅花書屋予以出版，但書中並未看到算盤或算子。

又，文政四年（1821）出有類書，有「新刊四言對相」標題，次行印有
虎林·胡氏文會堂校正 書坊徐龍蜂梓行 本文十摺的書，但自第八摺正面後半起，上下段均以三言為一段，書末附跋文一頁，印着
文政辛巳春十童 谷文二識（註十三）云云。因非親睹，錄供參考。
又松廼文庫題箋為「對相四言雜字」，末頁則為「魁本對相四言終」。
其依士農工商順序記載，在當時也值得注目。

關於中國方面的資料

王庭顯1941年在哥倫比亞大學圖書館發現「新編對相四言」一書而在其「珠算學」（1962）年所述如下：

宋朝楊輝不懂珠算

元朝陶宗儀對算盤珠有所記述

新編對相四言是 1436 年所出版

此書有九術的算盤圖及算子（算籌）的圖。

戶谷清一經由葉茂盛，自王庭顯取得抄本，王庭顯當時說北京圖書館有一本明初版本，並且說北京圖書館“善本書目”四卷中之第三卷第47頁之2，子部類書類記有

“新編對相四言一卷”明初刻本。

因係民國23（1934）年所見，迄今有無保存，就不得而知云。

王庭顯的研究成果也有詳述，惟此從略。

戶谷清一委託余介石探查北京圖書館有無此書，余介石連絡華印椿，華印椿也託好友在上海、南京、北京查其有無。

余介石找到明朝所印（年代不明）35×22公分、全8頁、每頁5行、每行8格、九術算盤圖之「新編對相四言」書，經華印椿將其抄圖送與戶谷清一（書為民間個人所有）。

往後的研究，受華印椿委託的張志公在「傳統語文教育初探」記有：

四言雜字 李元昊譯 宋史夏國博 第160頁

四言雜字 清屯溪開益堂刊 第160頁

魁本四言對相 清坊刻本 第161頁 等

三四言雜字 北京學古堂書目 第 161 頁

五七言雜字 北京學古堂書目

當時這類書想必出版了許多。

卷末語

依上列所舉，可明瞭魁本對相四言雜字一書在中國，在日本均有出版，以及明瞭了陳伯壽等人所作貢獻。這是我自戶谷清一所惠告「空華日工集」一文而查知者。

我之所以寫這篇，用意在表示：研究工作是逐次的累積而達成這一例證。

又中巖圓月和尚（1300~1375）著有「東海一集」，書中有九九詩，元朝時曾赴中國（1324），其卷之五，自曆譜中有文：

廳長元年辛亥
（一、三、一一年）
春在池房。就道惠和
尚。讀孝經論語。且
學九章算法。秋歸大
茲寺。多十月二十六
日，平貞時薨。其朝
日無光。而色赤似血。

身為和尚而能兼學中國的「九章算術」。

和尚學算木已是確知，當時有無算盤則不得而知。

又京都五大寺之一的東福寺，在應仁之亂（1468）也幸能不被燒毀，寺裡的了庵桂梧（1425~1514）85歲時，尚且膺命為遣明正使，渡航中國過。萬治元年（1658）久田玄哲複刻了「算學啓蒙」，依「數學紀聞」所述，他是在這東福寺找到這「算學啓蒙」原本的。

倘若往下思惟，尚可論述種種，惟想就此擱筆了。

1. 小林善八：日本出版文化史 第130頁
2. 川瀨一馬：五山版本之研究 第144頁
3. 木宮泰彥：日本古印刷文化史 第268頁
4. 川瀨一馬：五山版本之研究 第142頁
5. 川瀨一馬：五山版本之研究 第143頁

- 6. 木宮泰彦：日本古印刷文化史 第 266 頁
- 7. 小林善八：日本出版文化史 第 119 至 130 頁
- 8. 木宮泰彦：日本古印刷文化史 第 258 頁
- 9. 川瀬一馬：五山版本之研究 第 142 頁
- 10. 安田文庫也
- 11. 川瀬一馬：五山版本之研究 第 216 頁
- 12. 木村兼葭堂也，江戸時代中期，大阪富商
- 13. 稀書複製會（編輯兼發行人 山田清作）